報告

マレーシア国際シンポジウム報告

太田勝敏*

A Report on International Symposium
—Technology, Culture and Development at University of Malaya—

Katsutoshi OTA*

文化と社会発展に対する技術革新の役割りを討議

昨年12月12日（月）から14日（水）の3日間にわたり、Technology, Culture and Development をテーマとした国際シンポジウムがクアラルンプール(マレーシア)のマラヤ大学で開催された。この国際シンポジウムは、本学会とマラヤ大学、本田財団およびCentro di Ricerca e Documentazione Febbraio '74の3か国4団体が共催したものである。

シンポジウムの目的は、技術革新が文化と社会経済発展プロセスに与えるインパクトについて、先進国および途上国の経験を検討して、マレーシアの発展に役立てようというものであった。日本、イタリアの経験に加えて、新興工業国として隣国シンガポールのケースが発表されたほか、マレーシア側から外国技術のインパクト、あるいは技術開発に関し様々な実例が報告された。

シンポジウムには、日本から本田宗一郎夫妻、下田武三本田財団理事長夫妻をはじめとして、本学会および本田財団関係者等、約30人が参加した。このうち、論文発表者は本田財団関係で合田周平（電気通信大学教授）、中島嶺夫（東京外国語大学教授）、清水武明（長岡技術科学大学講師）、寺野寿郎（法政大学教授）、霍見芳浩（ニューヨーク市立大学教授）の5名、本学会からは岡並木、越正毅、小林實の各氏と筆者の4名であった。

イタリア側の出席者は12人で、うち5名が論文を発表し、また、シンガポールから1名が論文を発表した。現地サイドとしては、25名が論文を発表したほか、適宜オブザーバーが出席した。

i）基調講演

初日には、マハティール首相を迎えて盛大な開会式が行われた後、日本、イタリア、マレーシアのそれぞれの代表による基調講演により、実質的なシンポジウムに入った。マハティール首相は、技術と開発との関係において、文化の問題を一緒に議論することは今回が初めてではないかと指摘した後、社会は文化の産物であり、特に価値体系に依存しているとして、技術移転においても発展に向けて国民のdiscipline と自立心が重要であることを強調した。わが国で開かれるその種の国際会議での形式的な挨拶と異なり、原稿なしに聴衆に語りかけるこの若い首相の真摯な態度は、彼がマレーシアの近代化にか

* 東京大学助教授（本学会員）
Associate Professor, University of Tokyo
原稿受理　昭和59年1月23日

ける熱意をうかがわせて印象的であった。

日本側の基調講演は、合田教授が「技術移転に関する考察」として、技術移転は受け手側の努力が必要とされる双方向的なプロセスであり、文化的特質の類似性と技術の種の存在が成功の条件であることを強調した。続いて、イタリアのAmmassari教授、マラヤ大学のAziz教授が基調演説を行った。

ii）10セッション、29論文発表

午後からは、2～3の論文をまとめたセッションが始まり、3日間で合計10セッション、29論文が発表された。論文の内容は、社会学、経済学、工学から農学までにわたる学際的なもので、概念的理論的なものから具体的実証的なものまでアプローチも多様であり、対象も働く女性の生活から山羊の交配まで多彩であり、この種の学際的国際会議のむつかしさをうかがわせていた。

個々の論文の紹介は省略するが、イタリア側からは技術革新と文化との関係について抽象的な話が多かったのに対して、マレーシア側からはマラヤ大学等で行われている技術開発、および技術移転に関する実証的研究について具体的な事例報告が多かった。これは、マレーシア側の現地の研究レベルを紹介しようという意図によると考えられ、ヤシ油生産に伴なう廃棄物の肥料・飼料への活用、山羊の品種改良、主要鉱産品であるスズの新しい用途の開発、農村用の手押しポンプの開発といった、マレーシアに合った種々の技術開発について発表があった。また、技術移転のインパクトに関しては、日本からの進出企業の行動、製鉄業における技術移転の実態等の主として経済的視点からの実証的研究が報告された。さらに、開発が与える文化的社会的インパクトに関しては、都市へ流入した若い女性工場労働者の実態について、健康状態、居住条件、使用する言葉といった点から調査した結果が、5人の女性研究者によって発表されたのが、開発の陰の側面に触れている点で興味深かった。

本田財団関係では、霍見教授が「生産技術と企業文化の国際移転」、中島教授が「アジアにおける技術・文化交流の国際環境」、寺野教授が「工業教育における創造性の育成」、清水講師が「技術移転に関する日本の工学教育」と題する発表を行った。

iii）本学会員の発表

本学会関係の発表は、すべて交通に関する具体的な経験と指摘であった。まず、初日の午後には、岡氏が「交通における技術移転の新視点」と題して、気温と抵抗なく歩ける距離との関係を論じて、マストランジット等の新しい交通技術の導入にあたって、利用者の視点を計画、設計に活かすことの重要性を指摘し、併せて、現在学会で進めているマニラのLRT（Light Rail Transit）導入のインパクト事前調査を紹介した。

第2日目の午前のセッションでは、越、小林両氏の発表があった。越教授は、「都市交通管理の概要」と題して、既存施設の効率的利用により交通流を改善し、環境への悪影響やエネルギー消費を減らすという都市交通管理の考え方は、途上国都市にとって特に重要であることを指摘し、交通管理の具体的手法について論じた。

小林氏は、「総合的な交通安全対策の確立に向けて」と題して、自動車の急増の中にあってクアラルンプールの交通事故率が極めて高いことを指摘し、幼児教育、学校教育を含めた交通安全教育の導入を提案して、関心を集めた。

筆者は、第3日目の午前のセッションで、「都市計画と交通――都市クルマ社会に向けての日本の経験」と題する発表を行った。これは、急激な都市化と〝自動車爆発〟が進む東南アジアの大都市においては、国情に合ったクルマ社会を意図的に誘導するという考え方で都市計画や交通投資を進めることの重要性を、日本の都市の郊外スプロールと道路整備の遅れ等にみられる後追い的政策の失敗を例として、指摘した。

交通関係の他の発表としては、マレーシア側から「道路建設が環境に及ぼす影響」と題して、道路公害や水系のかく乱の報告があったほか、シンガポールより「チャンギ空港の計画と開発」と題して、シンガポールの新国際空港の計画から現在に至るまでの経緯と関連する調査研究についての報告が興味深かった。

閉会式では、越教授が日本側を代表して総括を行い、今後とも交流を深めていくことを提案した。

以上のように極めて多彩で、やや統一性を欠くシンポジウムであったが、マラヤ大学のRoyal Professorの肩書をもって敬愛されているAziz教授のリーダーシップと事務局の熱意によって、友好的雰囲気の中でスムースに進められた。事務局には、本学会のスタッフが加わったほか、文秀有限会社のスタッフが協力を惜しまなかったことを報告し、関係者の努力に感謝したい。